

顧 祿 年 譜 (續)

——『清嘉錄』の作者についての傳記ノート——

稻 畑 耕 一 郎

道光三年癸未（一八二三年） 二十八歳

二月、族伯顧日新を病にて失う。詩集『頤素堂詩鈔』刊行のため、知友にその序跋を依頼する。⁽¹⁾

(1) 朱春生の「墓誌銘」（『國朝耆獻類徵初編』卷四四二所收）に「道光三年春二月、顧君劍峰、病卒於家」とある。享年六十

一。顧日新については、前稿「顧祿年譜」（『中國文學研究』第八期所收、以下「前稿」と省略する）三〇七頁注(7)参照。

(2) 『頤素堂詩鈔』（以下「詩鈔」と省略する）には、多くの知友が序跋や題詞を寄せているが、その中にこの年の二月に病没した顧日新の「題鍊卿小阮茂才頤素堂集後」という題詞が見え、詩集の刊行がこの年以前から計畫されていたことがうかがえる。また、朱綬（酉生）の跋文には「道光癸未長至日拜識」とあり、やはりこの年に書かれたものである。

* 前稿では、この年、會試に應じて京師（北京）に上ったと考えたが、今これを訂正する（道光五年の條参照）。

道光四年甲申（一八二四年） 二十九歳

六卷本『頤素堂詩鈔』に收録する作品の選定が、道員王賡言（貫山）の手によってなされる。暮春、王賡言その跋を書く。⁽¹⁾

顧祿年譜（續）（稻畑）

秋、「省闈日記」を刊行する。⁽²⁾

(1) 『詩鈔』の林衍源の序（道光五年孟春）に「頃總之介予族姪侶梅、出其頤素堂詩集六卷、爲觀察王簣山先生所選定、已授梨棗、乞予爲序」とある。これによれば、『詩鈔』は當初六卷本として刊行されたこと、そしてそれは觀察（道員の尊稱）王廣言によって作品選定がなされたことがわかる。王廣言の跋には「大著胎息深厚、兼有寄托、眞清才也。吳下名流、定當拔戟、自成一隊。甲申暮春、識于滄浪寓館」とあるので、この年の春には、收録する作品の選定は終っていたと考えられる。しかし、果して本當に王廣言の手によって『詩鈔』六卷本は編まれたのであろうか。ただ、その名を借りただけはなかったか。

王廣言、字は簣山、諸城（山東）の人。顧祿との關係を直接明示する資料は見當らないが、『詩鈔』卷二に「和王簣山廣言觀察遊山詩三首」、卷五に「梅花嶺、謁史閣部祠、和王簣山觀察韻」の二首が收められており、しばしばその行樂に従って、詩を唱和したことががわかれる。一方、知友の言に、顧祿を呼んで「鐵卿錄事」、「詩鈔」倪希賢題詞、「鐵卿贊府」、「詩鈔」謝元淮題詞」とするものがある。「錄事」「贊府」とは、どのような職であったのか。思うに、それは正式の官ではなく、王道員の幕下の私設秘書のような役ではなかったか。周知のように、當時、地方に赴任した官僚たちは、任地での仕事を圓滑に進めるために、自らの經費で以て、有能な幕友を召し抱えた。それには、將來科擧に應じて官に就こうとする生員クラスの者が多く、生員の側でも縁故を求めて、權勢ある官僚の府に入ろうとした。道員である王廣言と茂才である顧祿の關係も、實はこうしたものではなかったか。それを、友人たちは「錄事」「贊府」ともっともらしい古名で呼んだのであろう。

従って、祿の『詩鈔』を王廣言が手ずから「選定」したというのも疑わしいことで、祿は「觀察王簣山先生所選定」と標榜することによって「後臺」を得、王廣言はそこに名を貸すことによって文人としての「聲望」を得るということでは

なかったか。先に引いたように（一五〇頁参照）、王麋言の跋文が、實際の編者のものとしては甚だ簡略であり、通り一遍であることも、疑念を生じさせる點である。王麋言の眼を通すことはあったであろうが、實際には、祿自身か、これに友人の章光猷、褚逢椿らが加わって作品を取捨選擇し、家刻本として出版したものであろう。

しかし、また顧祿と王麋言との間には、詩作についての考え方において相通ずるところのあったことも事實のようである。顧祿の詩は、師の李福子仙に似ると評されるが（前稿三〇八頁参照）、それはまた郷里の先人沈德潛の格調説、さらには王漁洋の神韻説の流れを汲むもののように見受けられる。『詩鈔』卷八には「覺生寺華嚴鐘歌、追和沈歸愚尚書韻」「蘆花四首、和查錡齋侍御元偈作、用漁洋山人秋柳詩韻、卽東衡儂明府」などの詩も見える。また、『詩鈔』の錢召棠（衡儂）の題詩には「可惜夫君生也晚、不逢沈宋兩尙書」という（沈は沈德潛、宋は宋鞏）。一方、王漁洋は山東新城の人で、諸城の王麋言の郷里の先人に當たり、顧祿の族高伯祖嗣立はその門下の人であったという事情もある。沈德潛が王漁洋を尊崇していたことも、その「小山薑詩序」（『歸愚文鈔續編』卷七）などによって知られるごとくである。

こうした網の目のような人間關係と、立脚する詩論の近似性によって、『詩鈔』六卷本は、王麋言の選定を経たということにされたのではないだろうか。『詩鈔』の林衍源の序も、これらの點に觸れて次のようにいう。「予受而讀之、清新俊逸、古體近太白、近體出入中唐。音節鏗鏘、情辭茂美、以是知劍峰之嘆賞、爲不謬焉。國朝詩學振興、新城王尙書、實爲巨擘。吾鄉沈宗伯繼之、論詩以溫柔敦厚爲教。隨園後起、盡反兩公之所爲、輕佻浮豔、而雅音於是乎亡矣。……予聞、簞山先生產於山左、一以新城爲圭臬。而總之於宗伯、又鄉先達也。總之見賞於簞山先生如此、其詩可知矣。去淫濫以歸風雅、非總之其誰任哉」。

王麋言の『詩鈔』への関わり方がどのようなものであったにせよ、『詩鈔』は、林序がいうように、まず六卷本として編集された。六卷本については、筆者は未見であるが、周作人が「清嘉錄」（『夜讀抄』所收）の中で「頤素堂詩鈔六卷、共

古今體詩三百二首、道光乙酉年刊本、刻甚精工」と述べている。言うところの「共古今體詩三百二首」は、八卷本の前六卷の詩數に相當し、八卷本は後に同じ版木を用いて増補されたもののようである。八卷本では、卷一に五十四首、卷二に五十二首、卷三に三十七首、卷四に三十二首、卷五に五十八首、卷六に六十九首、卷七に四十九首、卷八に五十七首の古近體詩が收められている。この他、『頤素堂叢書』（以下『叢書』と省略する）に收められた「紫荊花院排律」に四十首、『清嘉錄』に引かれる自作の詩が一首（他に断句一、曲二）、總計四百四十九首、これが現存する顧祿の詩のすべてであろう。また別に、賦三十四首が「雕蟲集」（『叢書』）に收められている。

- (2) 「省闈日記」（『叢書』所收）の書扉の裏葉に「道光甲申秋日鐫板」とある。この例からもうかがえるように、『叢書』に收められた十七種の著作は、執筆時期の如何にかかわらず、嘉慶二十三年（一八一八）の開雕以來、比較的長期にわたって斷續的に刊行されたようである。

道光五年乙酉（一八二五年）

三十歳

孟春、林衍源に『詩鈔』の序を乞い、六卷本『詩鈔』を上梓する⁽¹⁾。二月、順天府（北京）での郷試に應じて、はじめて北京に上る⁽³⁾。三月初旬、北京に到着。旅中に詩四十餘首を作る⁽⁴⁾。北京滞在中、知友に『詩鈔』の序文や題詩を求め、京官たちと詩文の應酬を重ねる⁽⁷⁾。秋、北闈に臨んだが、及第できず、傷心のうちに蘇州に歸る⁽⁹⁾。

- (1) 林衍源の序に「道光五年乙酉孟春、同學弟林衍源」とある。また、道光四年の注(1)所引の序を参照。「道光乙酉春日」とある錢守璞（虞山女史）の序も、あるいは上京前のものか。錢守璞は、字は壽之、號は蓮因、昭文（常熟）の人。花卉を得意とした女流畫家。畫家張騏（寶厓）の妻。

- (2) 六卷本『詩鈔』の刊年については、周作人「清嘉錄」（『夜讀抄』所收）参照。ただし、それが何月のことであつたかは言

及されていない。林衍源の序(注①参照)には「頃總之介子族姪侶梅、出其頤素堂詩集六卷、爲觀察王簣山先生所選定、已授梨棗、乞予爲序」とあるので、林衍源の序を得た後、すぐに上梓し、それを持って上京したのではないかと考えられる。六卷本が、上京以前の作品に止まっているのは、恐らくそのためであろう。

一方、この年の夏四月、北京で書かれた顧元愷の序には「昨以全稿來質、余再三展開……」とあり、あるいはこの時もお稿本のままであり、上京時に得た知友の序跋を併せて、秋に蘇州に歸ってから上梓した可能性も考えられないではないが、翌年(道光六年)には、上京時の作品を増補した八卷本を續いて刊行しているので、ここでは上京前の刊行を考えた。ただし、この點は、六卷本を見ることができれば、すぐに解決される問題であろう。

(3) 顧祿が北京に上ったことは、『詩鈔』卷七・八に收められた詩から知ることができるが、それが何年のことであつたかについては、明記されていない。小稿において、道光五年のことと特定したのは、次のような理由からである。

『詩鈔』卷七所收の「將爲北行感別四首」に詠う内容、及び卷八所收の「駕湖錢衛僕明府召棠、屬題對雨懷鄉圖冊」第四首の自注に「君與余、俱以調選滯都」とあることなどから、この時の北京行が科擧のためであつたことが確認される。次に、道光六年十二月に書かれた徐達源の『詩鈔』の序に「總之曾至寒家、以頤素堂詩集、乞序于余。時總之將應詔入都、因又出示將爲北行、雜別近作、聲情並茂、詞復懇摯」とあることからすると、それが道光六年十二月以前のことであつたことが知られる。

都に上つての應試とすれば、まず會試と想像されるが(前稿では、單純にそのように誤解した)、顧祿は順天府の鄉試に應じたものであるらしい。『吳縣志』(民國二十二年刊)卷十五の「選舉表七」の擧人の表に顧祿の名はみえず、また知友が彼を呼ぶのにいずれも「顧明經、總之」「總之秀才」「鐵卿茂才」「吳附生」と呼ぶばかりで、擧人または孝廉と稱していないことから、祿は鄉試に及第していないと判斷される(前稿を改める)。「明經」は、清では國子監の生員である貢生を指すが、『吳

縣志』卷十七「選舉表九」の貢生の欄には、その名を見出し得ず、従つて祿は捐納によつてその地位を得た例貢（例監）ではなかったかと思われる。正途の出身資格（恩貢・拔貢・副貢・歲貢・優貢）ではなかったが、それでも例貢として順天府の郷試に應じたので「謁選」「應詔」などといったのであろう。

祿の上京が會試のためでなく、郷試であり、しかもそれが道光二年壬午（この年、江寧府で郷試を受けた）の後、道光六年より前とすれば、道光五年乙酉の他は考えられない。この間、郷試が行なわれたのは、道光五年だけであるからである。

『詩鈔』卷七には、蘇州を出發してから北京に到着するまでの作品が、旅程にそつて收録されている。その中に「十四夜、舟次淮角樓、看月」「二月廿四日」などと期日や地名を明示した作品があり、その前後に並べられた作品から類推すると、蘇州を出發したのは、二月上旬のことであつたと思われる。

また、『詩鈔』卷七の卷末に「初入都門」の詩があり、この時の上京が最初の北京行であつたことがわかる。

(4) 『詩鈔』卷七「桑乾河、對月有懷」の第二首に「向晨鐘鼓帝城邊、已泮春冰三月天」とある。桑乾河に入ったとき、すでに月が改まり三月になつていたようである。

(5) 『詩鈔』卷七には、蘇州を出發するに當つて作つた「將爲北行感別四首」から、北京に到着するまでの作品四十九首が、旅程にそつて收められている。

(6) 江沅（鐵君）の跋に「乙酉穀雨日書」、顧元愷の序に「道光五年四月二十八日、鳳池鄉農、元愷序」とあり、ともに顧祿の北京滞在中に書かれたものと思われる。従兄元愷は、祿が北京滞在中に最も世話になつた人物であり、唱和の作も多い（『詩鈔』卷八參照）。他に錢召棠（衡儂）の題詞「鍊卿仁棟以頤素堂詩集屬題」も、この時のものか。上京時の作を集めた『詩鈔』卷八に「駕湖錢衡儂明府召棠、屬題對雨懷鄉圖冊」の詩が見える。

(7) 『詩鈔』卷八には、北京滞在中の作と歸途の作とが收められている。そのうち滞在中の作品には「穀雨前一日、寓齋杜

丹盛放、伯兄杏樓、招同蔡玉山家珩、楊星山庚兩水部、李馥堂給諫逢辰、陳蓮峯儀曹世泰、盧立峯師民部毓嵩、姜聽珂別駕廷燦、亢晴溪少尹澄、暨雨湖鹽掾、宴集紀事」「立夏前一日、陪黃春谷觀察承吉、秋山太守珠爾杭阿、李大令蕃、冷香臬贊府豐年、飲姻丈蔣雲篋侍御泰階、齋中賦呈」など、京官との應酬唱和の作が少なくない。

(8) 順天鄉試(北闈)は、通常秋八月に行なわれた。『詩鈔』卷八「都門錄別杏樓伯兄以詩餞贈賦答五首」の第一首に「榮名愧未立、愀焉還故郷」といい、第三首に「未遂捧檄心、尙待甲乙選」というのは、科擧に及第できなかったことをいうのであろう。『吳縣志』卷十五「選舉表七」の擧人の表にも、その名は見えない。

(9) 北京からの歸途、祿は失意落魄のあまり何もなすところがなかったようである。歸路の詩作は「就道後、了無吟詠、登渡江、始復握管」と題された作を始め、わずか五首で、上京の途に作られた四十九首とは甚だ對照的である。それは、「出門豈得已、修名吾所期」(「將爲北行感別」第一首)という意氣込みで、また家族の期待を一身に受けて上京した(同上)にもかかわらず、志を果すことができなかったことが心に重くのしかかっていたからであらうか。

道光六年丙戌(一八二六年) 三十一歳

蘇州府城内にあった正誼書院に入って引き續き科擧の勉學を續ける。⁽¹⁾ 秋八月、明末清初の「遺民」徐枋の祠の修復に着手し、翌九月に竣工。八卷本『詩鈔』を刊行する。⁽³⁾ この年までに、『吳語源』四卷、『吳語源補』二卷、『頤素堂古文鈔』二卷などの著作を完成させる。⁽⁴⁾

(1) 『詩鈔』の魏成憲(春松)の跋(丙戌首夏望後六日)に「余忝爲正誼書院山長、顧總之茂才亦來執業。詢知爲子仙高弟、風雅耽吟、淵源有自若、鏗而不已、所到正未可量。爰題其行卷、以勸之」とある。「執業」とは、弟子の禮をとって業を受けることであり、京師から歸った後、引き續き書院での勉學を續けたようである。正誼書院は、城内西南角にあった蘇

州府學の東、滄浪亭の北にあり、『蘇州府志』卷頭圖十一參照)、嘉慶十年、兩江總督の鐵保と江蘇巡撫の汪志伊によって創建された學校である(『吳縣志』卷二十七上)。

- (2) 徐達源の序(道光六年)に「仲夏宵銘(達源の子)自郡城歸、謂總之將新徐俟齋先生祠。余益異之。然猶以爲未果也。後知其冒暑入山、料量土木、不兩月竣工、祠宇煥然。……總之此舉、可不謂賢乎」とある。ここには「冒暑入山」というだけであるが、『蘇州府志』卷三十六(壇廟祠宇)に引かれる文柱撰「重修徐先生祠堂碑記」によれば「徐先生俟齋之歿、一百五十餘年。郡人士顧君祿等、募金以倡復新其祠、而以南嶽大師及戴吳兩先生之附經、始於道光六年八月、越月告成」とあり、八月に着工し、翌九月に竣工したことがわかる。

徐俟齋先生、名は枋、字は昭法、長洲の人。父の沂(字は九一)は、王朝鼎革の際、虎丘の新塘橋の下に身を投げ、明に殉じた人物であった。枋はその父の遺言に従って、出仕せず、靈巖山の背後に澗上草堂を編んで隱居し、宣城の沈壽民、嘉興の巢鳴盛とともに海内三遺民と稱された。沂は『明史』卷二六七に、枋は『清史稿』卷五〇一に、それぞれ傳がある。

徐枋の祠は、この澗上草堂の跡に建てられたものである。『蘇州府志』卷三十六に「徐先生祠、祀明舉人徐枋。在上沙、即澗上草堂。國朝康熙三十九年、先生之門人潘耒、贖舊屋、改建。嘉慶十四年、翰林待詔徐達源重建。奉吳祖錫・張舜臣・戴易釋儲公配。道光六年、顧祿修。二十六年、吳縣丞徐承恩修。其後燬。同治六年重建」とある。徐枋の祠の修築の経緯等については、徐達源『澗上草堂紀略』二卷、毛慶善『續編』一卷、羅振常『拾遺』一卷に詳しい。

- (3) 孫殿起『販書偶記』卷十七(民國二十五年、孫氏借閒居排印本)に「頤素堂詩鈔八卷、吳縣顧祿撰、道光六年精刊」と著録されている。ただし月は不明。他に「道光六年」刊本について言及した文獻を見ないが、この記述によれば、この年の刊本が存在することとなり、道光九年序刊本(後述)と併せて、『詩鈔』は都合三回版を重ねたことになる。

(4) 徐達源の序（道光六年十二月小除夕）に「與兒子晉銘友善、因悉其所著。有清嘉錄十卷、吳語源四卷、吳語源補兩卷、又頤素堂古文鈔二卷、叢稿十餘種。年甚少而多能若是、心已竊異之」とある。『清嘉錄』は後に刊行されたが、『吳語源』『吳語源補』『頤素堂古文鈔』が出版されたかどうかは不明。「叢稿十餘種」の内容も、明らかでない。

道光七年丁亥（一八二七年）

三十二歳

春三月、再び北京に滞在する。⁽¹⁾ その機會に、陳孚恩、張深らに『詩鈔』の題詞を求める。⁽²⁾

(1) 陳孚恩（子鶴）の題詞に「丁亥三月、訪鐵卿仁兄于都門、之圓通道院、即題其頤素堂詩集後」とあることから、この年の三月、北京にいたことが知られる。上京の目的は明らかでないが、あるいは緣故を頼つての獵官運動ではなかったか（一五八頁参照）。

(2) 張深（茶農）の題詞に「都門喜晤鍊卿明經、出示大集、爲賦短章、以誌欽佩」とあり、その詩の注に「徐俟齋先生祠、歲久傾圯、君力爲新之」とあるので、この題詞も、確かに道光六年以後、九年以前（『詩鈔』八卷本は、十年の刊）のことで、恐らくはこの丁亥の年のことであろうと推測される。

道光八年戊子（一八二八年）

三十三歳

秋、江寧府（南京）に行き、郷試を受ける。⁽¹⁾

(1) この年は、戊子正科郷試の行なわれた年である。顧祿がこれに應じたとの直接の明證はないが、北京から歸った後も、書院での勉學を繼續していることからすれば、常識的には重ねて郷試に就いたものと推測される。

先年、順天郷試（北闈）に應じて及第できず、北京を去るに當って作った詩「都門錄別杏樓伯兄以詩餞贈賦答五首」の

第三首に「未遂捧檄心、尙待甲乙選」の句があり、その自注に「嚴諭姑就縣佐、注銓部冊、候選。擬明秋仍赴南關」という。「明秋」とは、北關に應じた翌年の秋、すなわち道光六年の秋を指すものと思われるが、道光六年は戌の年で、正科はもちろん、恩科もなかった年である。しかも、道光三年から六年までの間には、正科、恩科が二年續いた年がなく、「明秋」の意味するところは、十分理解できない。

道光九年己丑（一八二九年）

三十四歳

鹽運使となる。(?)⁽¹⁾

(1) 姉壻の韓封が書いた『詩鈔』の序（道光己丑春分）の冒頭に「鐵卿、使内弟、天才邁衆、慧業夙稟、振秀野之宗風、踵玉山之韻事」とある。「齟使」は、鹽務行政を掌る鹽運使（都轉運鹽使司運使）の異稱であり、『清史稿』職官志によれば、從三品とある。在外交官としての官序は、按察よりは下であるが、道員の上にある。進士でも舉人でもない願祿が、この官を得るには、捐納によってであらうが、捐納によっても、通常は四品の道員・知府・鹽運司運同クラスまでであり、それにも種々の制約が伴った（許大齡『清代捐納制度』燕京學報專號22參照）。また、嘉慶末年から道光にかけては、鹽政が全面的に崩壊に瀕した時期であったが（道光十年十二月には陶澍が「兩淮鹽務章程十五條」を奉じて、鹽政の改革に乗り出した）、鹽運司の書吏は、なお隱然たる勢力を持っていたという（佐伯富『清代鹽政の研究』第六章參照）。従って例貢の願祿がこれを手に入れたとすれば、決して容易でなかったはずである。それとも、「齟使」とはいうものの、實際にはより下級の、あるいは末端の鹽務官であったのだろうか。

また「齟使」となった年も不明であるが、これもひとまず韓封の序の書かれた年のこととしておく。あるいは、道光七年の上京と關係があるかも知れないと思う。道光七年は、前年八月の旱水害と西域での回教徒の反亂によって、多額の國

費を必要とした年であり、太僕寺少卿梁中靖の獻議によって、大幅に捐納が認められた年であったからである（許大齡・前掲書）。

道光十年庚寅（一八三〇年） 三十五歳

孟夏、八卷本『詩鈔』を重刊し、併せて『清嘉錄』十二卷を上梓する。⁽¹⁾

(1) 『清嘉錄』の日本覆刻本（天保八年、一八三七年刊）の朝川鼎（善齋）の序に次のようにいう。「近刻清人詩集、舶到極多。以余所見、尙有二百餘部。而傳播之廣且速者、莫如顧君鎮卿頤素堂詩鈔若也。梓成於道光庚寅首夏、而天保辛卯（二年、一八三一年）三月、余得諸江戸書肆玉巖堂。蓋冬帮船所致也。夫隔海內外、而商舶往來、一年僅不過夏冬兩度、又且長碇之於江戸、相距四十日程而遠。然而其書刻成不一年、自極西而及於極東、所謂不脛而走、是豈偶然哉。……末又附清嘉錄十二卷、蓋紀吳中民間時令也」。

これによれば、『詩鈔』は「道光庚寅首夏」に上梓され、『清嘉錄』はその附刻本であったことがわかる。ただ、筆者の見ることできた八卷本『詩鈔』（内閣文庫本、宮内廳書陵部本、大阪府立中央圖書館本二部）には、いずれも刊記がなく、書物それ自體からは刊年を確認できなかった。また、『清嘉錄』については、それが『詩鈔』の卷末に附録されたものであったとする事實もなお未確認である（兩書の體裁がよく似ていることは事實であるが）。

宮内廳書陵部の『和漢圖書分類目錄』には「頤素堂詩鈔八卷 卷五以下缺、附清嘉錄、清道光九年版」とあるが、實地に調査したところでは、附刻の『清嘉錄』は存在せず、『詩鈔』についても、それが言うように「道光九年版」であるとの證據を見出せなかった。「道光九年版」としたのは、序の中で最も遅い韓封の序が道光己丑（九年）であることから、類推したものであって、確證があるわけではないようである。「道光九年序刊」とするのが、正確であろう。

また、書陵部には、別に『目録』に「道光十年版」という『清嘉錄』も架蔵されているが、これが本来『詩鈔』の附刻本であり、後に離れ本となったとの形跡も見當らない。

一方、『清嘉錄』の刊年が、道光十年であることは、原刻本の書扉に「道光庚寅首夏」とあるので一應確認される。ただ同書の顧承（宛山老人）の序には「道光十年六月朔日」とあるので、実際には、やや遅延して、この年の夏の終りごろに刊行されたものようである。

『清嘉錄』は、この後、題辭を増補した補修本が出されたようであるが（一六一頁参照）、光緒三年丁丑（一八七七）には『小方壺齋輿地叢書』（第六帙）の一種として、案語の部分（と本文の一部）を削り、名を「吳趨風土錄」と改めて刊行された。次いで翌光緒四年戊寅（一八七八）には、日本の翻刻本（天保八年、一八三七、一六七頁参照）に基づいて「嘯園叢書」の一種として重刊された。民國初頭に刊行された『筆記小説大觀』にも收められたが、臺灣商務印書館の人文文庫本は、これを復印したものである。王伯祥「庾稼偶識」（『中華文史論叢』一九七九年第四輯所收）の「清嘉錄」の條によれば、民國二十三年（一九三四）七月、新文化書社から排印本として出版されたようであるが、未見。

『蘇州府志』卷一三九（藝文四、風俗）には「顧祿清嘉錄三卷」と著録されているが、序にも「十二卷」とあるので、單純な誤刻であろう。

顧祿は『清嘉錄』の凡例に「擬另輯清嘉錄詩詞補遺若干卷、以補此書未備。脫蒙惠讀、彙以續刊」という。果して『清嘉錄詩詞補遺』若干卷は出版されたのかどうか。計畫だけに終ったかも知れない。

道光十一年辛卯（一八三一年）

三十六歲

秋、鄉試恩科が行なわれる。⁽¹⁾

(1) この年の秋は、正科郷試のある年であつたが、宣宗五旬萬壽を祝つて、恩科に切り變えられ、正科は翌年となつた。顧祿は、やはり、これに應じて南京に行つたのではないだろうか。

道光十二年壬辰（一八三二年） 三十七歳

五月、人に託して江戸の漢學者朝川善庵（鼎）に扇面に詩畫を題して贈り、『清嘉錄』に題辭や序を請う。⁽¹⁾ 秋八月、郷試が行なわれる。⁽²⁾

(1) 『清嘉錄』日本翻刻本（天保八年、一八三七年刊）の朝川善庵の序に「余私心竊謂、填海爲平地、縮地爲一家、儼獲親接塵教、聞所未聞、不知當何如愉快也。悵矣心飛、無翼何致、徒付一浩歎耳。豈意君亦謬聞余虛名、壬辰五月、扇頭題詩及畫、托李少白、以見寄示、且屬題詞於清嘉錄。余才學謏劣、何能任之。然傾慕之久、又何可無一言題簡端、以結知緣」である。

また、大窪天吉の題詩の序には「予讀顧總之先生清嘉錄、豔羨吳趨之勝、夢寐神游、不能忘於懷也。比先生書近作七首、贈朝川善庵以求序、并徵我輩題詞。因和原韻、並編次錄中事、臆料妄想、率成七首、夢中囈語、敢步後塵、聊博齒粲而已」とある。この大窪の序は、周作人が『清嘉錄』（『夜讀抄』所收）の案語の中で「頃於琉璃廠得原刻清嘉錄四冊、内容與翻本無異、唯題辭多二紙、有日本大窪天吉等三人詩九首」と述べて引用しているところに據つた。ただし、周作人が「原刻清嘉錄四冊」と言っているのは、果してどうであらうか。『清嘉錄』は道光十年に刊行されており、顧祿の書信が善庵のもとに届いたのが道光十二年（天保三年）五月である。大窪の題辭があるとすれば、周作人の手にした四冊本は、後の補修本ということになる。これによって、『清嘉錄』に補修本のあつたことが推測される。

朝川善庵、名は鼎、字は五鼎、江戸末期の漢學者。漢學者片山兼山（世播）の子であつたが、兼山中年にして没して後、

中國詩文論叢 第二集

醫者朝川默翁に養育される。十二歳にして山本北山に就いて學び、神童と稱され、長じて各地を歴遊、諸大名に親昵される。著に『論語漢說發揮』十卷、『古文孝經私記』二卷、『善庵隨筆』二卷などがある。嘉永二年（一八四九）没。享年六十九。

この朝川善庵の名を、顧祿はどのようにして知ったのだろうか。善庵は、顧祿の『詩鈔』と『清嘉錄』とを、それらが刊行された翌年の春、江戸の書肆玉巖堂で手に入れている（一五九頁参照）。その間、十箇月足らずにして、蘇州から長崎を経て、江戸にもたらされたわけであるが、さらにその後一年餘にして、顧祿から李少白なる人物を介して詩畫を贈られ、題詩を求められたわけである。鎖國という状況にも関わらず、その底流では兩國間の關係が甚だ緊密であつたことは、たとえば山脇悌二郎『長崎の唐人貿易』や大庭脩『江戸時代における唐船持渡書の研究』などによつても、具體的に指摘されているが、兩國の文人の間にこうした直接の連絡があつたことは、當時としてやはり數少ない例外的な事に屬するであらう。しかも、善庵が序に「豈意君亦謬聞余虛名」云々というところを見れば、『清嘉錄』を手にした善庵が、始めにその著者である顧祿に書信を寄せたのではないようである。では、何故、顧祿は善庵の名を知ることができたのであらう。

考えられることは、二つある。一つは、佐藤一齋の「朝川善庵墓碑銘庚戌代」に「至寛政戊午（嘉慶三年、一七九八）、從長崎鎮臺肥田豐洲赴於崎。又遊歷南肥薩摩、經五年而歸。其學益博、經業尤精。時吾先人聞其名、延之、禮遇亦優。……善庵下帷教授有年。初無意筮仕、及後感吾家（平戸藩松浦氏）之有舊契、幡然釋褐而起。於是待以大臣之禮、參豫政治、所資不尠」（『事實文編』卷六一所收）とあることである。すなわち、若くして長崎平戸に遊んだ時、またのち平戸藩に出仕した時、清國人と接する機會があつて、その名が蘇州の顧祿にまで達したのか。

今一つは、同じく碑文に「至乙亥（文化十二年、嘉慶二十年）杪冬、清國海舶漂到豆州下田港、異俗言語不通。下田係荊山縣令江川氏所治。善庵應縣令招、筆語贈答不辱國體、賞賜白金若干。至弘化三年丙午閏五月朔、幕府辱召賜謁、可謂希世之榮矣」（同上）とあることである。この時の「清國海舶」が、上海からの南京船であつたり、乍浦からの寧波船であつ

たとすれば、歸國の後、風説とともに善庵の名が顧祿の耳に達したことも考えられるであろう。善庵の『下田紀事』四卷（中根肅治『（慶長）諸家著述目録』所錄）は、この時のことを記したものとと思われるが、未見。

顧祿がその善庵への詩畫を託した李少白なる人物は、當時長崎に入港した南京船の脇船主（副船長）である。長崎に入港する唐船に發行された許可證の臺帳である『割符留帳』（長崎縣立長崎圖書館藏、關西大學東西學術研究所資料集刊九所收）に、その名がしばしば登場する。これによれば、李少白が最初に日本に來たのは、文政十二年己丑（道光九年）の十二月であり、以來天保元年庚寅（道光十年）六月・十一月、天保三年壬辰（道光十二年）正月、天保九年戊戌（道光十八年）正月、天保十年己亥（道光十九年）六月の六度にわたっている。このうち、天保元年六月の船の船牌主が廈門であった他は、いずれも南京籍の船であった。顧祿の詩畫を携えてきたと考えられるのは、『割符留帳』（文政十二年の冊）に「壬辰正月廿二日入津、薩州坊ノ津漂着、代 在留船主楊西亭、脇船主李少白 卯四番」と記されている、天保三年（道光十二年）正月入港の船であろう。船牌主は、南京の錢尙中である。「代」とあるのは、その代理人の意である。李少白自身が江戸に上ったのではなく、長崎の役人を経て、江戸の善庵のもとに届けられたのであろう。それが善庵の序にいう「五月」であった。顧祿は、扇面に書いた詩とともに畫も善庵に贈っている。顧祿に畫の心得があったことは、『詩鈔』卷八に「畫桃一枝、以貽蓉生、戲柬殷小巖孝廉」と題された詩のあること、『詩鈔』の錢召棠（衡儂）の題詞に「商量畫稿同摩詰、酬唱詩篇有健好」、倪希賢（小迂）の題詞に「論詩能脫俗、作畫本通神」などとあることによって知られる。また、友人であった韋光黻・貝點・褚逢椿らは、いずれも畫家として名を残した人々である。詩書畫に通じることは、當時の蘇州の文人の當然のたしなみであったのである。

周作人が言及する「大窪天吉」は、朝川善庵と同時代の漢詩人大窪天民、名は行、字は詩佛のことであろう。畫を善くしたことも知られる。善庵とともに、山本北山の門下である。天保八年（一八三七）歿。

(2) 道光十一年の注(1)参照。

道光十三年癸巳（一八三三年）

三十八歳

道光十四年甲午（一八三四年）

三十九歳

一月、甲斐の漢學者大森快庵（歛）、『清嘉錄』の中から蔡雲（立青）の「吳歛」を摘録し、『蔡雲吳歛鈔』として刊行する。⁽¹⁾

(1) 『蔡雲吳歛鈔』二巻は、「清顧鐵卿先生原輯、日本大森快庵先生鈔録」として、江戸の萬笈堂英平吉によって刊行された。快庵の引言には「天保癸巳端月」とあり、源亮（峽中隱士、澹然）の序には「天保五歲甲午端月」とある。正確な刊年は不明であるが、源亮の序に言うところから、この年のことと判斷される。同書には、附録として吳存楷の「江郷節物詞」が付いており、やはり快庵によって訓點が施されているが、これは『清嘉錄』からの「鈔録」ではない。同書は、長澤規矩也編『和刻本漢詩集成補編』に收められている。

快庵の「引言」には、次のように見える。「予去歲壬辰、客遊江戸數月、偶購得清顧鐵卿清嘉錄。書賈曰、是書刻成乎庚寅、舶來於辛卯、可謂新著也。……要吳中歲時記也。已其所引證、或文或詩、乃至瑣言小說、多足爲談柄者、豈啻典故可觀哉。中載蔡雲吳歛數十章、其詩淺近、而摸出情狀、酷肖我邦俗所襲行者。予隨讀隨鈔、遂成一小冊子。錄中次序、略具焉。間亦采接關係詩意者一二、而附注各詩之後、雖未足爲明辨、亦鐵卿具體微也。……若有因此書而購得全錄者、則鐵卿得同好於海外、亦野老之奇緣哉」。

『蔡雲吳歛鈔』なる書は、右の文に言うように、『清嘉錄』に引かれている蔡雲の「吳歛」七十四首（原作は百首）を摘録し、それに注を加えたもの。注は、顧祿の原文を大幅に節略しながら、極く一部自らの文章をもってつないでいる。

蔡雲、原名は維靖、字は立青、號は鐵耕（鐵翁）。乾隆二十九年（一七六四）の生まれ、道光四年（一八二四）に卒す。著に『蔡氏月令』二卷、『癖談』六卷などがある。傳は『蔡氏月令』『南菁書院叢書』所收の卷首、顧承の『吳門耆舊記』『小石山房叢書』所收などに見える。『蘇州府志』卷一三九（藝文）に「蔡雲吳歙百絕」（不分卷）と見える。顧祿は、これから『清嘉錄』にその詩を引いたのであろう。また、これには「自注」が付いていたようで、やはり『清嘉錄』の中に引用されている。

摘録して校點を付けた大森快庵は、名は欽、字は舜民、甲斐の人。朝川善庵の門人。嘉永二年（一八四九）没。快庵には『詩鈔』を翻刻する計畫があつたらしい。『清嘉錄』の天保翻刻本の善庵の序に「適又聞甲斐門人大森舜民、亦將刻頤素堂詩鈔。今與斯書（清嘉錄）合而行之、其傳播之廣且速、亦如前日自西而東、海之内外、無所不至。豈不愉快哉」とある。これによれば、『清嘉錄』が翻刻された天保八年（一八三七）の後、まもなく『詩鈔』の翻刻本も出されようとしたようであるが、あるいは計畫だけに終つたのか、現在それを著録する書目を見ない。今後の調査に待ちたい。

道光十五年乙未（一八三五年）

四十歳

秋、江寧府（南京）から蘇州に歸る。⁽¹⁾ 出仕を斷念し、陶淵明に倣つて庭に菊を作り、酒を酌み、詩を作つて心を慰める。⁽²⁾ 菊作りの過程を詠じた詩三十首を作り、輯めて『晚香吟』と題する。⁽³⁾ 孟冬、『晚香吟』を刊行する。⁽⁴⁾

(1) 『晚香吟』の顧承の序（道光乙未九秋）に「今年秋、歸自白門、栽菊數百本、把酒敲詩、以抒懷抱、并自製題、以發之」とある。

何の目的で白門（南京）に行っていたのであろうか。先には（拙稿「顧祿と菊——顧祿年譜補」「節令」第三期所收）、この前後の顧祿の處生のあり方が大きく變化していることから、韋光霽の小傳（前稿三〇四頁参照）に「事連、同繫於官」という

官に繋がれた「事件」との関連の可能性を考えたが、必ずしもそうではないようである（「事件」は顧祿の最晩年のことと訂正する。一七六頁参照）。この年の秋には、太后六旬による萬壽恩科が行なわれているので、やはり單純に何度目かの郷試受験のため江寧府城に行っていたと考える方が無理がないかも知れない。この時も、志を果たすことができず、失意のうちに蘇州に歸つたのであろう。

(2) 顧祿は、二十歳の後半で始めて郷試に臨んでより（前稿では道光二年の秋を最初の受験と考えたが、その前年の道光元年にも登極恩科が行なわれており、あるいはそれが最初であったか）、すでに幾度も落第し、十數年の歲月を經ていた。四十不惑という齡は、郷試の受験者として決して若いとは言えず、祿にとって一つの轉換期であつたようである。この秋、南京から歸つた祿は、陶淵明が四十一歳にして彭澤の令を辭して田園に歸つたのに倣い、自らも科擧による正途での出仕を完全に斷念したようである。そして、庭に菊を作り、酒を酌み、詩を作つて心を慰めた。『晚香吟』の自序（道光乙未九月既望）に次のようにいう。「夫淵明不爲五斗米折腰、而解組歸田。予亦秋風匏落、空詠寬裳、何如拋棄儒冠、學爲老圃、蹂躪籬落之間、與黃花結世外知己哉」。また、注(1)所引の顧承の序を参照。

これに對して、顧承は祿が逸群の才を抱きながら、それを發揮できないばかりか、今や隱棲せんとするのを惜しみ、また勵まして言う「嗚呼、士君子以康濟爲心、而沈淪鄉里。年華易邁、霄漢難期。乃與隱逸者流、灌花菑圃、以消壯志、不可可悲也哉。讀此編、不禁爲之惘然歎、慨然感矣。雖然韓魏公詩有黃花晚節香之句、鐵卿年方強仕、未爲遲暮、徐以俟之可也」。ここにいう「鐵卿年方強仕」によつて、この序の書かれた道光十五年が、顧祿四十歳であつたことがわかる。

(3) 『晚香吟』の自序に「余夙耽陶癖、歲華婉婉、嘗訪求佳種、駢羅蔓延、積久益多。……予家閩城城西、有堂曰頤素。庭不甚廣、短垣低簷、蒔菊頗宜。當夫燁然秀發、而拈花嗅蕊、汎以忘憂。昔楊盈川作菊花賦、左九嬪有菊花頌。雅人深致、自古盛傳。苟吟咏闕如、未免東籬減色。既倩貝上舍六泉繪藝菊圖、復逐韻製題、得詩三十章、名曰晚香吟。而藝菊之能事

次第、亦於詩乎寓焉」という。

巻頭に友人の畫家貝點（六泉）畫くところの「藝菊圖」一葉がある。庭先に水が流れ、遠くに城壁と低い山並みが見える。庭は廣からず、簷は低く垣は短く、書齋には端座する人物、庭には菊を作る童僕が描かれている。これが頤素堂であらう。

『晚香吟』一卷は、序にいうように、菊作りの過程を「一東」から「十五咸」までの平聲三十韻を順次押韻字として七律に詠じたもので、次の三十首からなる。同書は、日本中國ともに甚だ稀觀の書であるので、逐一その詩題をあげておく。思菊・覓菊・區菊・栽菊・養菊・灌菊・曝菊・風菊・露菊・刪菊・洗菊・縛菊・壅菊・催菊・探菊・菊華・菊色・菊香・菊影・菊夢・菊態・菊品・菊性・菊座・菊吟・菊圖・菊觴・菊實・菊萌・菊隱。

多くは、菊作りの過程を淡々と詠ずるが、間々作者の心情を挿むものがある。「菊隱」の詩にいう。「頓覺塵懷一例芟、田園歸去卸朝衫、秋深風露人無恙、家住柴桑境不凡、座上餘香拈袖薄、簾前皓月樂杯銜、逍遙心跡羲皇上、清夢悠然落翠巖。」

(3) 書扉に「道光乙未冬孟」とある。その裏葉に「古吳茶磨山房鐫板」とあり、他の祿の著作同様、私家版として上梓されたようである。『晚香吟』については、拙稿「顧祿と菊——顧祿年譜補」（『節令』第三期、節令社刊）参照。

道光十六年丙申（一八三六年） 四十一歳

道光十七年丁酉（一八三七年） 四十二歳

孟秋、『清嘉錄』が、日本で翻刻される。⁽¹⁾

顧祿年譜（續）（稻畑）

(1) 日本での翻刻本は、原刊本をそのまま版下に用い、これに句讀訓點を加えたもの。奥付の刊記に「道光庚寅孟夏原刻、天保丁酉孟秋翻刻」とある。和泉屋金右衛門・須原屋佐助等刊。訓點者は、藤堂氏久居藩の藩儒安原方齋、名は寛、通稱三平（吾）、號は知言である。

『清嘉錄』の翻刻は、始め顧祿から詩畫を贈られた朝川善庵が志したが、身邊に事あつて久しく果せず^{（一）}にいたところ、方齋が代つて刊行した。その間の経緯について、善庵の序にいう「於是、與二三不相謀、先將翻刻其書、更爲叙行之。而余適嬰大疾、瀕死數矣。至今、筆硯荒廢、塵積者三四年、以故、遷延度歲、不果其志、深以爲憾。久居安原三平、好學樂善、勇乎見義而爲。一日慨然謂余曰、顧君之於先生、可不謂相知乎。而吾亦妄承先生曲知久矣。若無知於知、何以相知之爲。吾當爲先生代刻之。庶幾其不負相知哉。遂捐俸授梓。今茲丁酉七月、校刻竣工。天保八年丁酉（一八三七）八月、善庵、五十七歲秋の文章である（『樂我室遺稿』卷二、崇文叢書所收）。

翻刻本は、その後、半紙本に刷り改め、目も毎冊に分け、題下に和譯を注したもの、さらには見返に「説明書」を加えたもの、逆に和譯と訓點とを削つたものなどが出された（長澤規矩也『和刻本漢籍隨筆集』第十一集「清嘉錄」解題、同『和刻本漢籍分類目錄』八六頁、同「補正」十頁參照）。「説明書」とは、次のようなものである。「此書ハ唐土ノ年中行事ニテ、其國ノ風俗ヲマノアタリニ見ルカ如ク、吾邦ノ人情トカハルコトナシ。ソノ趣キ清俗紀聞ト同ク、コレニ加フルニ民間ノ景物ヲ精クシルシタレハ、學問ヲ助ケ詩文ヲ作ルニ大ニ益アリ。江戸下谷御成道書肆青雲堂英文藏梓」。

この翻刻とは別に、注釋も書かれたようである。『大日本人名辭書』（明治十九年刊）の隨朝若水の項に「清嘉錄標注」と著錄されている。若水は、名は陳、字は欽若、京都の人。善庵と交友があり、その養子欽哉は善庵の門弟となつた。こうした人間關係から見て、この「清嘉錄標注」は、恐らく顧祿の『清嘉錄』に注を施したものであつたと思われる。この書は、他の數多くの著書とともに、天保十三年秋、火災にあつて烏有に歸したという（前掲辭書參照）。『清嘉錄』に注釋書ま

であったことは、翻刻に異版が多いこととともに、『清嘉錄』が、江戸末期の漢學者たちに、とくに朝川善庵を中心とした人々の間で、清國の歲時風俗を知る書物として熱心に讀まれたことの一端がうかがえる。長崎奉行であった中川忠英の『清俗紀聞』が刊行されたのは、寛政十一年己未（一七九九）のことであり、『清嘉錄』が受け容れられる素地があったのかも知れない。

顧祿の著作は、この『清嘉錄』や『詩鈔』ばかりでなく、『叢書』も舶載され、廣く讀まれたようである。就中、『叢書』に收められた「煙草錄附煙笛雜著」は、何度か版を改めて刊行されている。筆者の見ることできたものは、東北大學圖書館・靜嘉堂文庫・長崎大學圖書館經濟學部分館に架藏される三本二種である。

東北大本（甲種）は、縦二十三糎、横十三・五糎の縦長本（天頭に、端正な朱筆で書き込みがされており、「秘傳花鏡」「本草洞詮」「醫意商」「長崎夜話草」「昔々物語」「聖代百物語」の和漢書から關連の文が引かれている）。一方、靜嘉堂本・長崎大本（種乙）は、ともに縦十八・八糎、横十二・一糎の小型本である。甲乙兩種は、書形は異なるが、全くの同版本である。扉に嘉慶二十五年刊の原刊本のものを利用して他は、本文は新たに刻されたものである。三本いずれにも刊記がなく、校點者・出版者について考える手掛りがないが、長澤規矩也『和刻本漢籍分類目錄』子部・藝術類に次のような著錄が見える。

煙草錄一卷附煙笛雜著 清顧祿 褚逢椿同輯 刊（覆清嘉慶、江、和泉屋金右衛門） 半長一

「半長」（横が半紙本なみの大本）とあるので、前三本とはまた別種と考えられる。やはり刊年は不詳であるが、出版者として和泉屋金右衛門の名が見えるところが注目される（長崎大本も、その『漢籍目錄』には、和泉屋金右衛門の名が見えるが、書物そのものには刊記がなく、基づくところがわからない。また、東北大本は、その『和漢書古典分類目錄』に「明治刊」と記されているが、やはり刊記がなく、その基づくところは不明）。和泉屋金右衛門は、水戸御藏版頒行書林として、江戸は兩國横山町に玉巖堂という店を構えていた。玉巖堂といえ、善庵が『詩鈔』『清嘉錄』を手に入れた書肆であり（一五九頁注①参照）、

和泉屋金右衛門は、『清嘉錄』翻刻本の發兌書肆としてその名を列ねられている。出版者としては、文化文政天保期を中心に、元祿年間から明治まで和漢各種の書籍を刊行している（井上和雄・坂本宗子『増訂^{以來}書賈集覽』矢島玄亮『徳川時代^{出版者}集覽』参照）。校點者は明記されていないが、善庵に近い人物ではなかったかと想像される。あるいは、やはり安原方齋であつたのではないか。東條琴臺原輯、里見敦補校の『近代著述目錄後編』五（天保十三年六月序）の方齋の項に「清嘉錄以下校刊 六」に並んで「煙草錄 一」と著録されているからである。ただし、この書目は、その「例言」によれば、刊未刊を問わず、散逸を惜しんで列挙したものであるので、當時はなお稿本のままであつたかも知れない。

道光十八年戊戌（一八三八年）

四十三歳

一昨年来の菊作りが愈々昂じて、冬、菊の栽培法を論じた『藝菊須知』を執筆する。⁽¹⁾

(1) 『藝菊須知』は、菊の栽培法を論じた專著で、上下二卷からなる。上卷は、明の屠承燧（爾星）の『東籬集』に見える「藝菊十要」の十の項目について、改めて論じ直したものである。擇地・貯土・分植・灌漑・栽培・雨暘・蟲雀・修葺・養秧・護花からなる。下卷は、新たに十二の項目を設けて、自らと友人の菊作りの體驗から得たところのものを記す。培子・接本・護脚・區種・置盆・選竹・浸草・剔泥・採花・乞種・覓伴・辨性からなる。卷末には「菊宜」二十四則、「菊忌」二十四則が附載されている。顧祿によれば、菊に宜しきものとは、「金風・玉露・新霜・驕陽・月下・燈前・曠圃・平臺・屋顛・庭心・疎籬・扁舟・粉壁・薜石・磁盎・柴几・佳名・逸士・新詠・名畫・把盃・持螯・橘綠橙黃・陶詩陸賦」であるという。菊に忌むべきものとは、「霪雨・嚴霜・蟲蠹・雀啄・手摸・鼻嗅・艾本接花・櫻綫縛竹・堆山・論擔・昂價・焚香・酗酒・俗客・酒肆・茶坊・峻宇・重牆・採摘盈頭・羅列滿座・置不潔地・贈非其人・早陳座上・久閉室中」であるという。菊作りについて、なかなかやかましく、一家言を持つに到っている。

『藝菊須知』二卷の刊年（初印）は不明であるが、自序の末尾に「道光戊戌孟冬之朔、茶磨山人顧祿、書於校經精舍之南窗」とあるのによつて、執筆の時期がわかる。趙詒琛等編刊『藝海一勺』（民國二十二年刊）に收められている。

自序にいう「予年、來閉、關、抱、瓮、躬事畦圃、亦能量雨課晴、蒔紅種碧。……夫菊花之隱逸也、學圃又小事也。士之盲學自荒、仰孤培植、不克爲繁林之匠、作樹人之計。卒與隱逸者流、結伴東籬、銷聲匿迹。其志益卑、其心益苦矣」。

この序の言うところによれば、道光十五年の秋、南京から蘇州に歸り、志を官途より絶つてからは、厭世隱遁の氣持が益々強くなり、家にあつて門を閉じ、専ら「花之隱逸」たる菊の栽培に心を寄せたようである。その「成果」が『藝菊須知』二卷であつた。

序には「其志益卑、其心益苦矣」という。確かに出仕昇官を士人の價值とする生き方から見れば、このころの顧祿の「隱逸者流」の生き方は、現實からの脱落・敗北と言えなくもない。事實、青壯年期の顧祿は世に出て身を立てることを本願とし、またそうであるからこそ、この時の心情を「益卑」「益苦」と表現するのであるが、その言葉の裏に、次第に、こうした生き方こそが、人としての本性になつたものではないかとの開き直りにも似た自覺も生まれつつあつたようである。『叢書』に收められた「買田二十約」の自序には、次のような言が見える。「寡人拙於治世、易於忤世。惟是一花一木、一爐一琴、一樽一編、相與莫逆、伴我吟身。今則馬齒加長矣。會當積士爲室、編蓬爲戶、與老農老圃、結畎畝之緣。爰作買田雜說數十則。庶幾他日入山、不作生客也」。

「今則馬齒加長矣」とあるところからすれば、青壯年期のものではなく、この前後に書かれたものと思われるが、「選地築宅」に始まる二十則にわたつて、田園山村での世俗に煩わされぬ「眞實」の生活を理想とすることが述べられている。たとえば、その中の「客」という條には、次のようにいう。「約、客有以勢位相耀、財富相驕、諂脅相悅、機詐相嘗者、皆非坐中客、請同俗士駕。惟是巢箕之叟、洗渭之民、爛漫天眞、胸無城府、不妨一夜話、十日欽。無論黃冠緇衣、漁父樵

子、儘堪相對忘言」。

道光十九年己亥（一八三九年）

四十四歲

道光二十年庚子（一八四〇年）

四十五歲

病を得て、療養のために虎丘山下の塔影山館に假住いする。⁽¹⁾ここでも引き續き菊作りに勵む。⁽²⁾梅雨期に入り、再び愛妾を連れて東山浜の抱綠漁莊（東溪別業）に轉居する。⁽³⁾ここでの暮しは、詩を作り畫をながめる平穩無事な悠々自適の日々であった。この間のことを「東溪別業前後記」としてまとめ、併せて紀事詩二十首を作る。療養のかたわら、虎丘山周邊を歩き回り、その地に傳わる碑文・口傳の類を收集整理し、『桐橋倚權錄』⁽⁵⁾『雲岩金石錄』⁽⁶⁾の執筆に當たる。

(1) 顧祿の『桐橋倚權錄』卷八「塔影山館」の條に「俗呼大旱船。其旁落爲小旱船。在塔影橋內。爲皖人陳氏所築。道光庚子、予、以養病、僑居于是。其地與短簿祠宇相望」とある。塔影橋については、同書卷七に「在山浜內。國朝嘉慶三年、任太守兆珂建白公祠于蔣氏塔影園遺址、門首建橋、名曰塔影、便入祠之路、赤欄白石、麗景如畫」とある。相望む地にあったという短簿祠は、顧詒祿の『重修虎邱山志』卷七（祠）に「短簿祠、在虎邱山門內東嶺上。祠晉司徒王珣王珣兄弟、舍宅爲寺。居民立廟、祀爲土神」とあり、同書卷首の地圖によれば、試劍石の牆壁を隔てた東隣に位置している。これらのことから考えるに、顧祿が僑居した塔影山館は、虎丘山内の東南隅脚下、蔣氏塔影園に近接したところにあったようである。俗に「大旱船」と呼ばれたというのであるから、大きな木船の形の建物でもあったのだろうか。

(2) 『桐橋倚權錄』卷八「塔影山館」の條に「又于隙地藝菊數百盆、扁曰簞英、蓋節取楚詞語、有行吟澤畔之意也」とある。同じく「塔影山館」の條に「卜居未幾、以梅雨陡漲、徙于東溪別業」とある。その東溪別業については、同書卷八「抱

綠漁莊」の條に、次のように記されている。「在東山浜。本瞿兆駢宅、爲陳氏所購。予從塔影山館移居于是、繕爲東溪別業、挈蟾姬・鑿兒輩、吟詩讀書、消遣歲月。東北兩面臨流、爲競渡游船爭集之區」。塔影橋と東山浜とは相接する地であるので、塔影山館と東溪別業も、指呼の間にあったと思われる。

(4) 同書「抱綠漁莊」の條に「予有東溪別業前後記、并紀事詩二十首、刻入頤素堂詩文集內」とある。「東溪別業前後記」「紀事詩二十首」を見ることができれば、この間の顧祿の動向や暮しぶりをより具體的に知ることができるであろうが、それらを収めたという『頤素堂詩文集』が伝わっていないのが惜しまれる。ただ、同條に「挈蟾姬・鑿兒輩、吟詩讀書、消遣歲月」とあり、平穩無事、悠々自適の日々であったことが窺われる。蟾姬とは、愛妾の名であり、鑿兒とは、その侍女か書童の名であろう。韋光祿が『聞見闡幽錄』の小傳に「娶妾山塘之抱綠漁莊」というのは、この時のことを言うものである。

この別業には、知友らから寄せられた多くの扁額や聯が飾られており、それらからもここでの暮しぶりがいくらか推測される。すなわち「抱綠漁莊」の條に、記されているものを整理すると、次のようである。

扁「東溪一曲」(程世勛題、陸紹景書)

聯「聆棹歌聲、辨雲樹影、掬月波香、水綠山青、此地有出塵霞想。具著作才、兼書畫癖、結泉石緣、酒狂花隱、其人眞絕世風流」(北郭山人林樾撰書)

聯「如此烟波、只應名士美人消受溪山清福。無邊風月、好借瓊樓玉宇勾留詩畫因緣」(韋光祿贈)

額「含飛閣」「先秋得月樓」(王芭孫書)

額「知非草廬」(顧承)

聯「倭國遠求蕭穎士、鑒湖高隱賀知章」(錢塘孫元培撰書)

顧祿年譜(續)(稻畑)

聯「塔影在波、山光接屋。畫船人語、曉市花聲」(猶女德華書)

林琛や德華の聯は、とくにここでの暮しぶりを彷彿させるが、錢塘の孫元培の撰した聯「倭國遠求蕭穎士、鑒湖高隱賀知章」は一層注目に値する。晩年、鑒湖に隱棲した唐の宰相賀知章が、官途を斷念した顧祿の比喩であるとすれば、倭國から師として招かれた蕭穎士(『新唐書』卷二〇二)もまた、當然祿のことを擬えたものであろう。

先年、顧祿は朝川善庵に書翰を寄せたが(一六一頁参照)、恐らくその返書がすでに顧祿の手元に届いており、日本に名の知られていたことを以て、孫元培は祿を蕭穎士に擬えたのであろう。日本での『清嘉錄』の翻刻の事實を知っていたばかりでなく、その書物を手にしていた可能性も強い。天保八年丁酉(一八三七)秋、『清嘉錄』が翻刻された後から、この道光二十年庚子(一八四〇年)入梅までの間に、善庵に書信を届けた李少白が、二度長崎に來ているからである。天保九年戊戌(一八三八)正月と同十年己亥(一八三九)六月の二回である(一六三頁参照)。大窪天民らの題詩(一六一頁参照)も、やはり李少白の手を通して、顧祿のもとに届けられたものと思われる。韋光猷の書いた小傳には「刻清嘉錄・桐橋倚權錄、外洋日本國重鍍其版、稱爲才子」とある。

(5) このころ、顧祿の病はまださほど重くなかったようである。そこで、古書を博渉して書き抜きを作る一方、虎丘山の各地に脚を運び、碑文や口傳を採集し、虎丘の地誌『桐橋倚權錄』十二卷の執筆を始めた。同書の緒逢椿の序に「顧君總之有別業、在斟酌橋西。年來養疴水閣、白紵芒鞋、間與花農釣叟相往還、遍歷名勝、周知故事。仿顧雲美(詒祿)虎丘志例、輯成一書。病乾隆間任(兆麟)虎丘山志」之淺漏而一歸精當、名曰桐橋倚權錄」とある。斟酌橋の西にあって、年來病を養ったという「水閣」とは、抱綠漁莊のことであろう。

『桐橋倚權錄』十二卷は、府城の西にある虎丘を中心として、東は山塘橋、西は西郭橋、北は長蕩、南は野芳浜までの地域内の山水・名勝・寺廟・第宅・古跡・市廛・産業などについて記した地誌である。舊來の府縣志や虎丘志を襲った所

も少なくないが（先行書との重複は、出来るだけ避けるようにしたと、凡例にいう）、卷十一以下の「市廛」「工作」「舟輯」「園圃」「市蕩」「藥産」「田疇」の項は、獨自のものであり、最も精彩を放っている。これによって、當時のこの地域の生産活動や園藝・工藝の實際の様子を具さに知ることができる。この点については、顧頡剛・龔平伯らが異口同音に指摘し稱賛しているところである（同書の上海古籍出版社排印本所收の題識等）。

『桐橋倚櫂錄』のもう一つの特徴は、關連の古書を廣く讀んで、それを引用する一方で、實際にその地に出向いて、現狀を調べたり、古老に尋ねたりするなどして確認をしながら書いていることである。そのことについては、先に引いた椿逢椿の序にも觸れられているが、顧祿自身、そのことを凡例の中で次のように述べている。「是書皆躬自採訪、山前山後、雨風無間。或拏舟訪古、或載筆討今、抑且詢諸父老、證以前聞、始采入集。若謬誤相沿、即久在人口、不敢據爲臆斷」。こうした實證的で、なおかつ慎重な執筆姿勢が、この書の價值を、他の同類の書物以上に、高いものとしている。

書名にいう「桐橋」は、山塘にあった橋の名で、一名「勝安橋」ともいい、虎丘の最もよく知られた橋であるので、これを以て書名に冠した。「倚櫂」は、唐の李嘉祐の「送嚴員外」（『全唐詩』卷二〇二）に「春風倚櫂闌闔城、水國春寒陰復晴」とあるのに基づく（凡例）。先には吳地の歲時記を書いて『清嘉錄』と名づけ、今また虎丘の地誌を『桐橋倚櫂錄』と名づける。この点にも、雅趣を好む顧祿の感性の一端がよく表われている。

- (6) 『桐橋倚櫂錄』の「凡例」に「往歲予養痾山中、已撰有雲岩金石錄若干卷、茲不復載」とある。往年病を養った「山中」とは虎丘山に他ならないであろうから、『雲岩金石錄』の執筆も、この時期と考えられる。「雲岩」は、虎丘山寺の別名を雲岩禪寺ともいなので、この寺にあった金石の釋文解題を記した著作であったのではないだろうか。『桐橋倚櫂錄』卷九の「周王子吳鼎」の條に「鼎文詳雲岩金石錄」と見える。同鼎は、東晉のころから虎丘山寺に傳わるという銅香爐である。

道光二十一年辛丑（一八四一年）

四十六歲

道光二十二年壬寅（一八四二年）

四十七歲

二月、『桐橋倚權錄』十二卷を刊行する。

(1) 顧頤剛の同書の題識に「此書刊于道光廿二年、公元一八四二。越八年、金田起義、書版在戰事中當焚毀、故印行不多。

沈靈百年、至今乃知于世、亦異事也」とある。刊行が、この年の二月であつたことは、上海古籍出版社版の出版説明に據つた。

同書は、『蘇州府志』卷一三九（藝文・山川）に著録されている。そこには「凡例」の文章の一部が引用されているので、顧頤剛は「沈靈百年」とは言うが、府志編纂時（光緒九年刊）にも實物が参照されたことが知られる。従つて、俞平伯が「題顧頤剛藏桐橋倚權錄、兼感吳下舊悰絕句十八章」の序に「亦未見著錄」というのも正確でない。

*

道光二十三年癸卯（一八四三）、顧祿は四十八歳を迎えたはずである。しかし、この年以後の祿の動向をうかがう手掛りは、現在のところ何も残されていない。ただ、友人の韋光黻が『聞見闡幽錄』の小傳の中で「爲友陳某誘致邪僻。事連、同繫於官」（前稿三〇四頁参照）というのは、これより後の出来事ではなかったか。

顧祿の連座した事件について、謝國楨は『桐橋倚權錄』の題記（前掲書所收）において、太平軍・小刀會の起義の事に關係したのではないかと疑っている。まず、韋光黻の小傳に「如曹顧兩君、皆可深惜者」と併稱される曹增（字は稼山）の遺稿『儀鄭堂殘藁』が、その没後、上海の紳商徐渭仁（紫珊）の手によって春暉堂叢書の一種として刊行され、その徐が小刀會と關係

があつたことによつて獄に下つてゐることから、「邪僻」というのも、「挾妓聚賭之事」ではないに違ひないという。そして、「誘致邪僻」とは、その詩文に時に「新穎之識、嫉供之慨」が露われていることから見て、一時に志を得なかつたことから、太平軍・小刀會の起義に参加した許起や蔣敦復らと行動を共にしたのであらうという。

しかし、併稱される曹増が太平天國や小刀會と關係を持つて獄に下つたというのであればともかく、その遺稿の刊行者がと
いうのでは、論據が甚だ弱いのではないだらうか。『吳縣志』卷六六下に見える曹増の傳によれば、その生涯は、次のようなものであつた。

曹増、字稼山。工詩・古文・詞、受知陳頤道（文述）先生。屢困棘闥、嘗以事陷獄、傾其家。後僦舍楓江、窮餓死。其詩長於言情、格調清新。在嘉道時、名與王井叔（嘉祿）埒。身後遺著散佚、上海徐氏爲刊儀鄭堂殘稿二卷。讀珠仙館遺稿

この傳からうかがう限り、顧祿と曹増とが併稱され、惜しまれてゐるのは、兩者がともに人に秀でた才能を有しながら、幾度も科擧に失敗し、才能を十分に開花させぬままに、ある「事」によつて獄に下り、なすところなく終つたという運命が似てゐることからであると考えられる。その「事」の内容は、ともに取るに足らぬことではあつても、必ずしも同じであつたわけではないであらう。

曹増が獄に陥ちたことについて、韋光猷の『聞見闡幽錄』の曹増の小傳に、少し詳しく言及されている。すなわち、それによれば、曹増は博徒を匿つたという無實の罪を着せられたといふのである。

後以事得罪於張縣令。張銜之及任元和、清晨排闥繫稼山出、指爲窩賭。其實隣家趙某所爲、強以附之。獄具詳司至督署。陶（澍）方陞任兩江、遂嚴駁之。張令無如之何。既出罪、貧甚而卒。

ここには、曹増の死んだ時期については、明記されていないが、『殘藁』の徐渭仁の序は、道光二十四年（一八四四）に書かれており、曹増の死は、さらにそれに何年か先立つであらう。咸豐元年（一八五一）に廣西の金田村に兵を起した太平軍との關

係は、従つて全く考えられない。

顧祿についても、同様である。太平軍が南京を陥したのは、咸豐三年（一八五三）であり、さらに蘇州を占領したのは、七年後の咸豐十年（一八六〇）のことである。劉麗川率いるところの小刀會が上海で起義したのも、咸豐三年九月であり、同五年（一八五五）には同會は壊滅している。顧祿が太平軍、あるいは小刀會と關係して事件に連座したとすれば、この間のことであろうが、祿はこのころすでに没して鬼籍にあったと考えられる。

なぜなら、顧祿の小傳を書いた友人の韋光黻でさえ、咸豐三年癸丑（一八五三）に没しているからである。錢辰の『共賞集』『聞見闡幽錄』所收の徐徵「洞虛子事蹟考」所引に「癸丑、移家延祥鄉而卒、年六十五」とある。顧祿の死は、もとよりこれ以前に相違なく、曹増同様、道光年間であつた可能性が高い。假りに咸豐年間まで生きたとしても、その事件の發生は道光末年のことであろうから、太平天國や小刀會との關係を想定することは、甚だ困難である。

むしろ、時期的なことからすれば、「誘致邪僻」とは、阿片の吸飲や賣買等に關することを想定した方が、まだ可能性としては高いであろう。それはまた「邪僻」の語と矛盾するものではない。これにも確たる根據があるわけではないが、褚逢椿との共編に係る『煙草錄附煙簞雜著』があり、元來その方面に強い關心があつたことがわかる。また、その中の記述からもうかがえるように、顧祿の周邊には、若いころから阿片吸飲者があり、志を得なかつた晩年には、祿もまたこれを常習するようになったことは、全く考えられないことではないからである。晩年、病を得て療養生活を餘儀なくされたのも、あるいは阿片の吸飲と關係があるかも知れない。そのことは、祿を「誘致」したという友人の「陳某」なる者が、いかなる人物であつたかがわかれば、かなり明確になるであろうが、それも現在是不明である。ただ、『桐橋倚櫂錄』卷八の「塔影山館」の條に「爲皖人陳氏所築」、「抱綠漁莊」の條に「本瞿兆駢宅、爲陳氏所購」と見える「皖人陳氏」とは、あるいはこの「友陳某」であるのではないかと思われる。韋光黻は小傳の最後に『易』（比の卦の六三、象傳）を引いていう「易曰、比之匪人、不亦傷乎。如曹顧

兩君、皆可深惜者」。之に比せんとすれど人に匪ずとは、亦た傷ましからずや、と。友として親しむべきでない人間と交ったことが、身の破滅を招いたというのである。

顧祿の生涯は、決して長くはなかったようである。獄から解き放たれた後、家に歸つてまもなく病を重くして生涯を終えた。韋光黻の小傳には「旋以疾卒」とある。知命になるかならぬかの齡であつたのではないだろうか。その才能と爲人を知る者にとっては、惜しんでも餘りあることであつたに違いない。

*

顧祿の生涯には、不明な部分が多い。零碎な傳記資料が、ほぼ顧祿自身の著作の周邊に限られるのは、始めにも記したように、顧祿が當時の顯官でも、大文人でもなく、市井の一書生に終始したからに他ならないであらう。その代表作『清嘉錄』『桐橋倚櫂錄』にしても、從來の學問體系の中では、いわば「雜書」として軽く扱われ、その正當な價值が十分認められなかつたことも、今日まで、その著者顧祿について、一篇の文章も草せられなかつたより根源的な理由であるかも知れない。しかし、『清嘉錄』は、歳時という〈時間〉の位相において、『桐橋倚櫂錄』は、地誌という〈空間〉の位相において、清代中後期における吳地の民間の文化の姿を、甚だ具體的に、かつ立體的に浮び上らせている。しかも、その著述に當っては、多くの書を博渉しながら、ただ學識によるのではなく、現地に脚を運び、古老を訪ね、臆斷を避けて慎重に筆を進めている。今後、吳地の文化を研究する上で、あるいは他の地域、他の時代との比較研究を進める上で、兩書の内容は一層その輝きを増すに違いない。そうであれば、その著述に力を注いだ著者の生涯と爲人についても、自と關心が向うこととなるであらう。一介の書生として生涯を終えた顧祿ではあつたが、その書き残した著作の價值は、決して他の碩學にも劣るものではなかつたと言えるのではないだろうか。

小稿は、「年譜」というにしては、あまりにも内容の貧しいことに内心忸怩たるものがあり、その中にも誤りの少なくないことをひそかに恐れている。ただ、考察の過程において、從來存在の知られなかった『晚香吟』を発見することができ、その文章から生年を推定できたこと、従って事跡と年齢とを對照して考えることができたこと、江戸の漢學者との關係をやや具體的に述べることでできたこと、没年についても、おおよその限界を設定することができたことなど、すなわち生涯の大枠を決定できたという點において、顧祿、及び『清嘉錄』研究の最初の一步と慰めることができるかも知れない。それにしても、小稿が多くの不備をかかえ、將來新しい資料の發見と調査とを待つて補訂すべき點の少なくないことは、筆者自ら深く遺憾とするところである。ただ玉を引く磚とすることができればとの想いから、敢てここに第一次の報告をし、識者の示教を乞うこととした。

〔附記一〕 本稿で用いた顧祿の著作のテキストとその所藏先は次の通りである。閱覽・復寫を許可された諸機關に對して、謹んでお禮申し上げる。

『頤素堂叢書』十七種 嘉慶道光年間刊本（早稻田大學圖書館藏）

『頤素堂詩鈔』八卷 道光九年序刊本（内閣文庫藏、宮内廳書陵部藏、大阪府立中央圖書館藏）

『清嘉錄』十二卷 道光十年刊本（内閣文庫藏、宮内廳書陵部藏、大阪府立中央圖書館藏） 日本天保八年覆道光刊本（汲古書院影印）

『和刻本漢籍隨筆集』卷十一所收、朝川善庵舊藏江東末晞齋藏） 同後修本（早稻田大學圖書館藏） 光緒四年刊本（『嘯園叢書』第

三函所收） 民國初頭刊本（『筆記小說大觀』所收、臺灣商務印書館『人文庫』特四三七所收）

『晚香吟』一卷 道光十五年刊本（早稻田大學圖書館藏） 同鈔本（東洋文庫藏）

『藝菊須知』二卷 道光十八年序刊（『藝海一勺』所收、民國二十二年排印本、京都大學人文科學研究所藏）

『桐橋倚櫂錄』十二卷 道光二十二年刊（上海古籍出版社、一九八〇年排印本）

『省闈日記』不分卷 光緒三年刊本（『小方壺齋輿地叢書』第五帙所收）

『吳趨風土錄』不分卷 光緒三年刊本（『小方壺齋輿地叢書』第六帙所收）

『煙草錄附煙簞雜著』不分卷 日本刊本、刊年不明（東北大學圖書館藏、靜嘉堂文庫藏、長崎大學圖書館經濟學部分館藏）

〔附記二〕 本稿の前半部は、『中國文學研究』第八期（早稻田大學中國文學會、一九八二年十二月刊）に、またその補論を『節令』第三期（節令社、一九八三年三月刊）に掲載した。それらには不備もあって、本稿で補訂した部分もあるが、併せて参照いただければ幸甚である。

〔追記〕 『頤素堂詩鈔』六卷本の刊行時期について、本稿一五二頁に、道光五年乙酉の春、上京直前とする考えを述べた。それについて、その後、同僚の古屋昭弘氏に上海市圖書館に所藏される六卷本『詩鈔』の調査を依頼したところ、六卷本の扉の裏葉には「道光乙酉春正月、金匱石塔里鐫版」とあり、卷六の末葉にも「道光乙酉正月、吳郡顧氏初雕」とあるとの教示を得て、その事實を確認することができた。八卷本の卷六の末葉に界線の一部が削り取られた跡があるのは、そのためのものであろう。